
ケーキ/銀神

深海

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケーキ／銀神

【Nコード】

N6856A

【作者名】

深海

【あらすじ】

神楽が銀時のためにチョコレートケーキを焼きました。

神楽が銀時のために焼いたケーキ。彼が大好きな甘い甘いチョコレート味の。

「できた！……けどなんだか焦げてるみたいネ」

オーブンレンジから出したチョコレートケーキは黒すぎて、僅かに焦臭い。

神楽は眉根を寄せてしばらくケーキを睨みつけ、恐る恐るフォークを差し入れた。それを口に運ぶと、腕を組みじつくり吟味する。

「……無しだナ」

「それ、神楽ちゃんが焼いたの？」

神楽の背後からケーキを覗き込む新八。神楽は慌ててケーキを隠すように両手で囲う。

「なんで隠すの？」

「……美味しくない……失敗しちゃったネ焼きすぎヨ」

せつかく作ったのにと、しゅんと肩を落とす神楽。新八は優しく微笑み、神楽の頭をあやすようにぽんぽんと軽く叩いた。

「大丈夫銀さんなら食べてくれるよ味なんか関係ないんだから」

「だ、だれが銀ちゃんにあげるなんて言ったネ！」

「違うの？」

全て見透かしたようににんまりと笑う新八に、神楽は言葉を詰まらせる。そこへタイミングよく銀時が帰宅した。

「うおーい帰ったぞ」

「やべっ！」

「えっ！ちよつとなんで隠すのさ！」

ケーキを隠してしまおうとする神楽を新八が止めようとする。銀時が二人を見たとき妙な格好でピタリと止まり、二人そろって銀時を見たため銀時は思わず後退る。

「な、なんだよお前ら二人して……」

「銀さん、神楽ちゃんがチョコオツ！」

言っってしまったとする新八を神楽は殴りつけてしまった。新八は全く悪くないのに気絶するほどの衝撃を受け、その場に倒れこんだ。
「……おいおいバイオレンス娘どうしたってんだよ」

神楽は状況を飲み込めずにいる銀時の眼前に、思いきつてチョコレートケーキを差し出した。

「コレ、お前が焼いたのか？」

直接見れずに、うつ向いたまま黙って頷く神楽。

銀時は神楽が持っているケーキを取り、フォークも使わずにかぶりついた。

神楽が味見をしたときはただ甘過ぎるだけでチョコレートの味はなく、表面は焦げて苦かった。銀時はそれらを全く気にした様子もなく食べ続ける。

「銀ちゃ……」

「おう、不味いな。食えたもんじゃねーよ」

愛さえあれば味なんて関係ないとは言っけれど、不味い物是不味い。

銀時は不味い不味いと言いながら結局は全て食べてしまい、神楽はそれをずつと嬉しそうな笑顔で見ていた。

「銀ちゃん今度はプリン作ってみたネ！」

「え……勘弁してください俺最近ずっと下痢なんですけど」

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6856a/>

ケーキ/銀神

2010年10月14日12時10分発行